中東の地域性をめぐる

小杉 泰

中東班の一年にわたる活動では、中東の地域研究に生態環境の観点をできるだけ取り込むことを課題とし、中東各地についての具体的検討も行われてきた。さらに「世界単位」という概念が中東に適用できるかという検討も重ねてきた。高谷さんは主に東南アジアと中国を代表的に扱われているが、中東の場合は中国の複合的な世界単位に近く、これを「文化世界」という概念で捉えることができないかという議論も出されている。

その場合、生態環境や歴史性という、外側からの規定要因や過去の規定要因を重視していくのか、あるいは「現在」あるいは「未来」を重視していくのかという、地域を捉えるスタンスの問題は、特に中東での議論では重要になるだろう。

例えば、湾岸諸国という言い方があるが、古来、アラビア湾がネットワークの形として動いてきたという議論がベースではなく、湾岸で石油がとれるということから出てきた地域認識である。湾岸諸国という中東の中のサブ単位が、非常に大きな実体を持ち始めていることは否めない。しかし、これはやはり現代、さらに将来において重要な位置づけを持つ地域概念であり、歴史的に見れば、小さな産油国はほとんど登場せず、国という単位として通時的に扱うこともできないような状況がある。また、現在の中東紛争の大きな要素であるイスラエルという国も、20世紀に登場した国である。中東の枠組みをどの時代で扱うのか、あるいは歴史と現在の両方を統合した形で扱うのか、重要なポイントになっている。

また、生態環境や風土、あるいは歴史のプロセスを重視することも含めて、地域を「面」として捉えていく「属地主義」でいくか、それとも、「人」が作り出す地域として捉える「属人主義」という問題がある。中東の場合は属人主義的な要素が多く出てくるが、文化的要素の役割をどう評価するかが問題になってくる。

例えば、アラブ世界という表現を認めれば、それはアラブ人のいる場所として規定され、非常に属人主義的になる。かつ、アラブ人が何であるかは、血統よりも文化的要素で規定される。極端に言えば、文化によって地域が規定されることになるだろう。そういう違いを中東の特徴として考えるべきか、あるいは地域性を世界的に考えたときに、要素として入れていくのかという問題になるだろう。

中東の形成には、近代以降の外的な力と内在的な形成要因がある。現在の中東と呼ばれている地域を考えると、アラビア語圏、トルコ語圏、ペルシャ語圏という形で捉えることができるだろう。この三つには、イスラーム化と何らかの水準のアラブ化という共通項目がある。これは現在のトルコ語やペルシャ語が、原トルコ語、原ペルシャ語ではなく、アラブ化されたもの

だという認識である。まず、そのところで中東と非中東が切れるのではないだろうか。

外的な問題は、いうまでもなくオリエントの分割として中東が成立していることである。極東が一方にあって、近東、中東がある。19世紀的な形では近東だったが、近東と中東を区別することに意味がなくなり、それを合わせて中近東という言葉が生まれ、その全体を20世紀には中東と呼び始めた。それ自体、西洋側の処理対象としての地域の名称である。

ただ、イスラーム世界を分割しての中東という観点では、イスラーム世界の中心部分を切り取ったというイメージがある。それはイスラームの発祥の地が含まれていることと、聖地が含まれていること以上に、最後にイスラーム世界を政治権力の一つとして代表していたオスマン帝国の領域が、ほぼこの地域と一致するという問題が関わっている。東方問題というのは、オスマン帝国をいかに解体するかという問題と考えられる。外的なものを見ると、その解体過程から現代中東になったと捉えられるだろう。

しかし、内面的な文化の規定性を考えると、イスラーム化とアラブ化が決定的に重要であろう。アラブというのは、紀元7世紀まではアラビア半島にしかいなかった。現在の主要なアラブ諸国は、多くがアラブ化した国だと言える。

さらに、アラブ世界は中東から北アフリカに広がり、しばしば「中東・北アフリカ」と言わざるを得なくなるような連続性がある。アフリカ研究でも、アフリカ大陸全体ではなく、主にサハラ以南が話題にされ、北アフリカは外して議論される。これもアラブ世界の拡がりという問題と関係している。

また、東南アジア研究との比較で気になるのは、外文明という概念である。東南アジアにとって外文明というのは、多くは、オリエント的王権から始まって、中東からやってきた。中東は外文明の震源地なのかという問題がある。また、東南アジアでは世界帝国が成立せず、中東は古代から世界帝国の地であったという議論がなされている。それは中東にどのような特徴を与えるのか。地域を考える場合に「地域の特殊性」を設定した場合、外文明や世界帝国は普遍性を主張する原理であり、その意味で中東では「普遍性を主張する地域の特殊性」という議論をしなければならなくなる。果たしてこのような議論が成り立つのかという疑問が、我々には依然として残っている。

現代では、地域を捉える場合に「国民国家」は重要な単位になっている。しかし、中東ではかなり脆弱な概念でしかない。他の地域とも共通するが、植民地支配によって分割が人工的に行われたり、植民地化されなくても、周辺が植民地化されてしまうことによって自国領が確定してしまった状況がある。だが問題はそれだけではない。産油国に典型的な、保守的な君主制

諸国がある。世界でも君主制の国は減っているが、そのうちのかなりの部分が中東にあるというこの意味も興味のある問題だ。そういう君主制諸国は、文化的な血統意識に基づく部族的社会であり、国民意識は希薄である。

また、国民国家を否定する急進主義が、1950年代から現代に至るまで、非常に強く働いている。アラブ民族主義（共和革命によるアラブ統合の運動）では、アラブ全体が一つの国民国家であり、既存の国家は、その中にある分割された国家であるという議論がなされてきた。最近では、イスラーム革命（共和革命+汎イスラーム主義）がある。これはイランが震源地であるとされるが、必ずしもそうではない。イランではそれを国是とする政権が成立しているが、地域の中にある文化と共鳴し、内側から、あるいは外側から、もっと大きな枠組みで、国民国家に対するネガティブな考え方を出している。

それを支える文化的伝統を考えると、文化としてのイスラーム化の問題がある。イスラーム的世界観での自己認識は、最も大きな単位として、イスラーム世界総体があり、一番内側のところに自分という「個」がある。その中間に自分の帰属する実在上の社会集団があるという構図が成り立つ。この社会集団というところに「国民国家」がなかなか入り込めず、「個」に収斂していくか、イスラーム世界総体へと拡大していく傾向がある。

その中で、ウンマ意識というものが、イスラーム世界の「大伝統」として強く存在している。ウンマというのは「普遍的共同体」と訳してみたが、この共同体は、村落共同体のような実態的なものではなく、イスラーム世界が全体として単一の共同体であるという想像上のものだ。しかし、理念だけで成立するものではなく、かなり実態性もある。地域を文化がいかに規定するかという点で問題になるだろう。

例えば、「もてなしの美德」の普及からウンマを考えてみよう。客をもてなすこと自体はどこにでもあることだろう。だが、イスラームそのものが、イスラーム法の概念として客の権利を設定し、それを推し広めている。特に中世の時代においては、ウンマという概念がある場所はどこでも自由にいけた。イスラームが広がる限り、イスラームは一つのウンマであるという意識が広がり、それによって、客としての権利が享受できる。単なる想像の普遍共同体ではなく、実態性もある。それがあからこそ、政治理念として出てきたときには力をもつ。

だが、このような伝統的な社会制度は、「国民国家」の登場で解体され、払拭されてきた。自己認識の概念に馴染まないまま、国家という事実上の中央政府の領域が非常に拡大し、安定しているのが19世紀以降の状況だろう。それは国民意識とは必ずしも重なり合うことなく、現実問題として存在している。地域全体と、地域の中のユニットとしての「国民国家」の問題を

考えるときに、中東の場合は「国民国家」をなきものにしたいという力が、他地域よりも強く働いているように思う。

中東においては、やはり宗教が特徴的な要素になるだろう。例えば、中東では人は必ず宗教を持ち、宗教のない人はいないというのが常識である。それを私は「ミッラ意識」と呼んでいる。ミッラを「宗教社会共同体」と訳してみた。一般的な宗教の理解は、地縁・血縁とは異なった、任意の社会集団における共通の信仰や世界認識ということだと思いが、ミッラという場合には、人が必ず帰属する社会共同体があり、その共同体が名前をもっている。人々の心の中に住むイスラームではなく、イスラーム共同体（ムスリム共同体）というものがある。これはイスラームだけでなく、中東におけるギリシャ正教の場合も、ギリシャ正教の共同体があるという認識が成り立つ。つまり、ミッラ意識には社会的実体があることになり、人間は共同体的な社会的生き物であるとすれば、必然的屬性として宗教がある。宗教が無いことは社会性が無いことに等しくなり、それはありえないという等式が成り立つ。

地縁と血縁、そして本人の選択によって社会を形成する社縁があると考えると、イスラーム世界ではその間にミッラ縁を想定することができる。人間には必ず宗教があり、宗教なしに生まれることはないが、イスラームの家庭に生まれたから、死ぬまでイスラームとは限らない。宗教は信仰の体系であり、各宗教間を移動することはできる。ただ、生まれながらに必ず持っているという意味では、地縁・血縁に類する性格もある。我々の社会で宗教を考えるようなものとは多少異なることから、その中間のものとしてミッラ縁を設定してみた。ミッラ縁を契機として集団形成がおこなわれる世界と捉えることができる。ただし、ミッラを行政単位として組織化した、オスマン帝国のミレット制は別に扱いたい。ここでは昔からある宗教観として問題にしている。

このように、人に付着する社会共同体としての宗教は、同時に人と共に動き、地域を越えていく。その結果として、ヨーロッパ、北米、南米などにも中東系の宗教コミュニティができた。ヨーロッパの幾つかの国では、絶対数は少なくとも、イスラームがキリスト教に次ぐ第二の宗教であるという状況が生じている。属人的に中東の特色が移動していくというふうにも言えるだろう。

ただ中東の場合、注意しなければならないのは、容認される宗教が非常に限られている点だ。セム的一神教の故地としての中東という問題があり、非常に長い間固定しているような、つまりイスラームや、キリスト教、ユダヤ教が、伝統的に認識されている宗教であり、新宗教は認められていないところが非常に多い。その意味では、宗教の分布がスタティックになっている

面があり、地域性を見る上でのポイントにもなるだろう。

イスラームの規定性を歴史的にみたときに、宗教としてのイスラームと、システムとしてのイスラームは、分けて考える必要がある。イスラームそのものは、他の宗教共同体間との契約によって共存するという前提がある。そうするとイスラーム世界は、必ずイスラーム以外の宗教を内包することになる。だが、イスラームを宗教そのものとみなせば、イスラーム世界はイスラーム教の世界でなければならないという矛盾が生じる。ここでいうイスラームとは「イスラーム的体制」と理解した方がいい。

そういう体制が形成された結果、中世から現代に至るまで、家族法は宗教法に依存する形が継続している。これは、人間のアイデンティティや認識を考える上で重要だろう。例えば、婚姻は宗教法で規定され、そのほとんどは同一宗教共同体内での結婚を推奨する構造になっている。人は生まれながらにして宗教を持つという原理は、人がある固定された宗教共同体の中に生まれ出る構図をつくり出す。近代化の優等生と呼ばれていたレバノンにおいてすら、この構造は変わらない。生活を規定する宗教の力は、その宗教を温存するイスラーム体制そのものが残したと言えるだろう。

近代までに、文化的な意味でのイスラーム化、アラブ化がかなり進行し、中東では基本的にはイスラームおよびアラブ化されたキリスト教が主流になっている。これに対して、近代化に伴う世俗化の過程が進んできたが、近年それがある種の限界に突き当たっている。60年代以降の宗教復興がしばしば話題にされるが、イスラームだけではなく、中東におけるキリスト教やユダヤ教でも、宗教復興現象が起こっている。このことは未来を包み込んだ形で見ても、過去の規定性がもう一度力を持ち始めようとしていると考えることができるだろう。

次に、「世界観」の機能という点で中東を考えてみよう。世界単位を規定する上で、世界観を共有できる単位が話題になってくる。例えば大伝統と小伝統という考え方で見れば、自然生態が強く作用するような小世界における世界観と、イスラームのような外文明が供給するような世界観とがある。自然発生的には、人間の住んでいる世界の中で世界観が作られていくが、外文明が大きな世界観によって浸透してくると、自己同化する世界が大きくなっていく。中東のように外文明が供給する世界観は、文化的規定性によって非常に強いものになる。そのように普遍化作用が強い場合、世界観によって地域を規定していいのかという問題がある。世界観自体が、ある程度一般化された形で提示されてくるのではないだろうか。

そこで、イスラーム化のメカニズムから考えてみた。現在のイスラーム世界というのは、イスラーム化の拡大した結果だと言えるだろう。イスラーム化とは、必ずその当該地域をイス

ラーム化すると同時に、イスラームが当該地域の要素に染められ地域化する。例えば「イスラーム的エジプト」と「エジプト的イスラーム」が同時に生成する構造でしか成立しない。一般論として、普遍的イスラームというのは、イスラーム化を起こすメカニズムとしては存在するが、実態化したものとしては出てこない。必ず地域的イスラームになる。それを認識しておかなければ、中東はイスラーム世界の一部であるとか、中東はイスラームの中心であるとか、あるいは中東の特徴はイスラームであるという言い方をしたとき、混乱するばかりで、的確な理解ができなくなるだろう。

ただ問題は、このメカニズムが普遍化のメカニズムであるとしたとき、「普遍性はある程度の地域化を前提としているがゆえに普遍的に機能する」という論理が働く。普遍性が地域性を前提とするならば、地域性が普遍性に対して特殊性を主張する原理とは言えなくなる。中東を考える上では、この問題は非常に気になる問題だ。また中東の規定要因としてのイスラーム化・アラブ化と、地域化の問題を考え併せると、「中東的イスラーム」と「イスラーム的中東」が存在することになる。そこでは、イスラーム世界を分割して中東としたときの地域的特殊性と、何がイスラーム世界を中東と非中東に分けるのかを論じなければならないだろう。

中東はそれ自体として、開かれた地域としての特性を非常に強くもっている。それは属人的世界という、そもそも人に付帯して動き、地理的境界に遮られないという本来的な開放性である。また、外に広がるだけでなく、受容性もなければ開放性があるとは言えないだろう。湾岸の産油国でも、様々な社会矛盾を含みながらも、多くの出稼ぎ労働者を受け入れるという、たいへんな受容力がある。これも一つの開放性と捉えるべきだろう。

ソ連崩壊にともない、中央アジア・イスラーム諸国が独立してから、中東地域の拡大論は大きな話題になっている。中東に北アフリカが括弧つきで入っているのは当然として、さらに中央アジアまで入れてしまう「メガロ中東」という表現がされるようになってきた。ソ連崩壊後の中央アジア・イスラーム諸国は、イスラーム圏であることはもとより、トルコ語圏・ペルシャ語圏として捉えれば、現在の中東の要素と非常に共通する地域である。今日論じた問題点で中東を規定すれば、中央アジアまで広がっていくことになる。後は経済交流や、当地人達の認識という実際的な問題だろう。ソ連によって存在していた境界意識が溶けるかどうかは、もう少し先の話になるだろう。しかし、現在から未来へ展開して中東を考える場合には、このことは重要な問題になる。同時に、過去の共通性によって生じてきた地域として考える必要もある。中東は中東として閉じて考えるべきか、それとも開いた形で考えるのかということが問題になるだろう。

コメント

上岡弘二

まず、言語学に関わる立場と、イランを研究している立場からコメントすると、小杉さんの示されたアラブ語圏・トルコ語圏・ペルシャ語圏という三つの範囲の範疇に、入りにくい言語がどうしても出てくる。ペルシャ語圏をイラン語圏という形で表す方が適当だという気がする。また、トルキスタン諸語という言葉が、トルコ語圏でメガロ中東になったときの立場から出てくるが、あまり広まった言葉ではなく、おそらくチュルク諸語という形で入れていくことになるだろう。細かいことだが、つけ加えておきたい。

中東とはメガロ中東の全てであり、その地域全体に基調色としてイスラームがある。イランの立場から言えば、基調色のイスラームにもグラデーションがあると言えるだろう。1978～9年に実現したイラン・イスラーム革命は、イラン人による普遍的なイスラームの再発見・再認識であったが、やがてイラン・イラク戦争が始まり、イラン人によるシーア派（スンナ派に対するイスラームの少数派）の再認識に他なくなる状況も出てきた。イスラームという基調色に違った色の基調色が重なり、混合されて見分けがつかない。そのどちらもが分離することも不可能だが、確かにイランの場合は色合いが違っているという状況だろう。おそらく同じことが、東南アジアのイスラームの地域に関して言えるのかもしれない。

イラン・イスラーム革命の指導者であったホメイニ師は、革命の指導者、イラン・イスラーム共和国の創設者という称号の他にも、実は「ウンマの指導者」という称号があった。少なくとも革命後しばらくの間はそう呼ばれていた。そうするとイスラームの1割しかいないシーア派の指導者が、ウンマというイスラーム共同体全体の指導者であるということは、正統であるスンナ派の立場からは受け入れられない。また、1988年にホメイニ師は、後継者のハメネイ師に「法学者の最高権威者はイスラーム法を政府の為に一時停止することも可能である」という書簡を書いている。これも、イスラームの正統派の立場からは、容認できない発言ではないか。イランのシーア派の人達にとって、コーランやイスラーム法のシャリーアは、主語的論理のようなもので、述語的論理は、預言者ムハンマドの血を受け継ぎ、しかもササン朝の王家の血統を引き継いだイマームと言われる人達になるのではないか。敢えて小杉さんのイスラーム全体をくくる立場に対して異を立てるとすれば、そういうことが言えるだろう。

先ほどから、研究分野によって対象の階層化、分節化が違うということ、あるいは研究者の姿勢の問題、視線の問題等が出ているが、イスラームという大きな基調色でくれる中東の中

に地域性を認めるかどうかは、研究者が地域をどの高さから見るかということに関わってくる。小杉さんの発表は、アラブ圏全体、イスラーム圏全体をカバーする高さからの視点に近く、全体が基調色に見えてしまう。ところが私が論じた視点は、イラン全体をカバーする程度の高さであり、同じように見えてもどこかに異質な色が見えてくる。もっと視点を下げていけば、その地域の固有性や、最終的には個々の人間が見えてくることになるだろう。

視点の高さが一定であっても、観察者の動く速度の問題も関わってくる。これは研究対象の人間が動いていても同じで、相対的な速度の問題がある。車で移動している場合、歩いて見ている場合、ロバの背で見ている場合、表面採集するときのように地面にしゃがみ込んで、せいぜい1m四方だけを見ていくような場合と、ずいぶん見えてくるものが違ってくる。速度が落ちるほど、模様ではなく地が見えてくることになるだろう。

それ以上に大事なものは、研究対象となる人々の立場から考えた、地域性とは何かという問題だ。そこに住んでいる人達自身の認識の問題。多分そういうときには、他者との対立でのみ意識される、カウンター・アイデンティティの問題がある。その時に言語というのはかなり重要なものとして表面に出てくる。特にアラブ人のアラブ人意識というのは多数派であり、あまり強く表に出てこない。アラブ語圏を領域国家に分節する必要があるのかどうか。話し言葉は別として、コーランの言語に基づく書き言葉の領域では、領域国家に分節する必要はないというのが本当のところだろう。ところがイランの場合はアラビア語ではなく、言語に関してもイラン人意識が強く出てくることになる。

もう一つ、属人主義の立場で言えば、中東の遊牧民の移動についての問題がある。夏营地、冬营地で500kmもの距離を移動している遊牧民がいる。そういう人達にとって地域性とは何か。面の問題でも捉えきれないものが出てくる。主体にとっての地域性という問題ともあわせて、この場での議論を期待したい。

質疑応答

弘末雅士 普遍化が強い場合には世界観そのものの一般化が強くなり、同時に普遍性そのものが地域性を前提とするという話は、イスラームのシステム自体が異なる宗教共同体間の契約を前提とするがゆえに、普遍性が問題になってくる。その場合、普遍化と世界観と

の関連は、世界観そのものの一般化が強くなるものとして理解していいのだろうか。

小杉 世界観の中でも、特に自分達が帰属する地域は何かというときに、イスラームの場合には世界共同体を提示してしまう。それを受け入れた人が、自分達はイスラーム世界に

帰属するのだと言い始めると、それが地域の規定になるのかという問題を強く感じた。地域化される過程で、そういう大きな帰属意識と対立しなければ、そこに帰属しつつ実際には地域化した意識を持って矛盾が起こらないことが多くある。特に、国民国家と重層的に、あるいは地域の共同体と重なるときに、自分をどう規定していくかという問題が大きく出てくるだろうと思う。

古川久雄 中東の地域性として、普遍性を求める、あるいは主張する姿勢が強いということが語られたが、イスラーム以外にも、ユダヤ教やギリシャ正教もある。宗教の形は、それぞれに違うが、世界観として、イスラームもユダヤ教もコプトも、同じだと言えるのか。そういう形で中東地域が捉えられるのだろうか。

小杉 中東の場合、イスラーム化だけではなく、イスラーム化とアラブ化であることがポイントになっている。イスラエルはヘブライ語を復活したが、中東の、少なくともアラブ圏に関する限り、ユダヤ教もアラビア語化している。宗教観は違って、ユダヤ教も、キリスト教も、「神」を「アッラー」と呼ぶような状態が成立している。そういう意味での文化的な水準化が進んでいる。三つの宗教の間では、ものの考え方はそれぞれに異なる。

ただ、人は必ず宗教に帰属するという中東的な意識は違わないだろう。その場合に、イスラームを宗教のことではなく、システムそのものとして捉えてほしい。

古川 宗教を持つのが当たり前で、持たないものは共同体のメンバーではなく、人間でもないような意識は、日本人にとってはわかりにくい意識だろう。そういうものが生まれてくる地域の個性とは、突き詰めれば何だと言えるのだろうか。

小杉 とても答えきれない問題だ。ただ、宗教を持たないと共同体もないというのではなく、宗教自体が社会共同体的に存在している。

だから、宗教がないというのが社会性が無いという意味になる。「宗教」とは既に中東的な形をしている。中東では宗教がなければいけない、日本とか東南アジアはそうではないという言い方自体が、既に問題からズレていると思う。中東の場合は、そういうところまで宗教と言う。そうでないところは宗教そのものの意識も全く違う。

つまり、宗教という言葉が表すものが同じだとした上で、宗教の規定力に違いがあるというのでは、中東の意識とは話が食い違ってしまふ。それで「ミッラ」という言葉で制限した話にしてみた。